

総政 100 冊の本・書評編

「汝の欲するところをなせ」

(ラブレー『ガルガンチュワ物語』テレームの僧院ただ一つの規則)

孔子『論語』(鈴木(實)先生)

孔子の言葉は平易ですが、「ウーン」とうなされます。「己の欲せざる所、人に施すなかれ」など、噛みしめるほど味がでてくる言葉のオンパレードです。どこから読みすすめても、きっとあなたの人生にプラスになることを保証いたします。

『般若心経』(鈴木(實)先生)

たった300字足らずのお経です。「色即是空。空即是色」など、皆様もよくご存知でしょう。日本人の精神に大きな影響を及ぼしてきた思想が濃縮されています。すぐ声に出して読んでみましょう。

ショーペンハウアー『知性について、他四篇』(鎌田先生)

哲学(philosophyの原意は「愛知」)は知が到達するすべてに関心を持つ総合学であり、総合政策の理念にも通じる。「哲学するために最初に求められる二つの要件は、第一に、心にかかるいかなる問をも率直に問い出す勇気をもつ、ということである。そして第二には、自明の理と思われるすべてのことを、改めてはっきりと意識し、そうすることによってそれを問題としてつかみ直すということである」(11ページ)という主張は、自分の関心専門領域に閉じこもらず、領域横断的な知的共同体を理想とする私たち総政人が心に刻み込むべき思想でもある。

B・ラッセル『ラッセル幸福論』(伊佐田先生)

様々な哲学者や文学者たちが「幸福」について論じていますが、ラッセルの幸福論は、非常に読みやすく、理解しやすいものです。非常に分析的な科学的論拠に満ちた論旨の展開は議論の進め方という視点からも参考になるでしょう。

幸福を実感できなかつたり、辛さを感じるとき

には、この本を読むことで、なぜ幸せを実感できないのか、自分自身の幸せを阻害しているものは何なのかを探求し、あなた自身が幸せに生きるためのヒントを見つけることができるでしょう。

西田幾多郎『善の研究』(柴山先生)

かつて、日本の哲学界は世界を凌駕していた。ひとりの天才は、東洋と西洋の哲学の根底(存在論)をむすびつけ世界の哲学を可能にした。それが西田であり、日本の近代哲学が生んだ逸材であった。正直、西田の原著は読みにくい。エール大学出版会(Yale University Press)が英文で出版した翻訳(“*Inquiry Into the Good*”)で読んだほうがはるかに楽である。『善の研究』は、20世紀初頭、アメリカの哲学界をリードしていた、ウィリアム・ジェームズらのプラグマティズムと共通する問題意識を持ち、それらを大胆に解決した。残念なのは、日本では、西田を超える哲学者が輩出していないことである。西田以外に、田辺元らのすごい哲学者がいるが、西田のレベルには達していない。

パウル ティリッヒ『生きる勇気』(渡部先生)

1886年生まれドイツ人の神学者ティリッヒは、多くの研究者に影響を与えています。今、生きる意味、存在の意味といったことが問われる現代社会で、このティリッヒの著書は、私たちが何を道しるべにして生きていくべきかを考える際に非常に役に立つ本です。少々難解かもしれませんが、是非4年間のうち、一度は目を通してほしいと思います。

田坂広志『未来を拓く君たちへ』(伊佐田先生)

死を目前にして、もう一度この人生と全く同じ人生を生きよといわれたとき、その問いに一瞬の迷いもなく「YES」と答えることができるだろ

うか。この問いに、よどみなく「YES」と答えたのなら、その人生は悔いのない人生。たとえ、多くの挫折や困難を人生において経験していたとしても、それらがすべて自らの成長のための貴重な経験であると考えることができたのなら、悔いのない喜ばしき人生といえるはずです。この本を手にした君は、様々な挫折や困難に遭遇しても、それらを成長の機会と捉え、自らの使命に向かってたくましく生きる力を手に入れることでしょう。

梅原猛、稲盛和夫『人類を救う哲学』(鎌田先生)

京セラを設立した稲盛和夫(現・京セラ名誉会長)と独創的な歴史解釈により「梅原日本学」を打ち立てた梅原猛とが現代に贈るメッセージの書。「人類はその欲望をエンジンとして、持てる英知を駆使し、科学技術の進展に邁進してきた。その結果、人類は物質的には豊かな社会を築くことができた。しかし、現在地球環境問題やエネルギー問題に直面している。」(1ページ) — この冒頭の発言は、多くの総政人が抱く不安を表現しているといえるだろう。ふたりの著者は、それぞれの領域の第一線にありながら、絶えず常識を疑い、スケールの大きな物語を語ってくれる。彼らの一つ一つの考えに賛同するかどうかは別として、この本は、本当に「独創的に考える」とはどういうことなのかを、知的飽食に飼い馴らされた現代人

に思い知らせてくれる。

高木仁三郎『市民科学者として生きる』(吉野先生)

近年、科学技術と市民をつなぐ学問(STS)や、サイエンスカフェといった実践に注目が集まっている。その中で、日本のエネルギー国策の一つである原子力発電一つを見ても、諸反対運動とのせめぎ合い、チェルノブイリ等の大事故の影響、副産物のプルトニウムの兵器転用問題、放射能を出し続ける核のゴミの処理問題など政策課題の宝庫である。同時に科学技術の専門家の自立した参与が不可欠な現場でもある。

この本は、自ら原子核研究者・公立大学教員のポストを辞して、在野に「原子力情報室」を設立し、市民のための原子力情報を第一線の専門家の立場から発信し続けた、著者の自伝である。本書を読むことは、何らかの政策や技術に読者が携わるにあたって、少し立ち止まり、その社会的影響と自分の立ち位置をとらえ直すよい機会になることだろう。著者が、オルターナティブなノーベル賞とも言われるライトライブリット賞を1997年に受賞したことを最後に付け加えておく。

* * * * *

「祈りを唱えながら統治をすることはできないんですよ」

(コジモ・ディ・メディチ『ルネサンスの歴史』より)

「(君主が)競争するには二つの方法があることを知らねばならぬ。第一は法により、第二は力による。前者は人間に固有なもので、後者は獣に属する。しかし第一の方法だけではしばしば十分でないから、第二の方法に頼らなければならぬ事がある。とりわけ君主は獣と人間との両方法をよく使い分けるべきを知っていなくてはならぬ」

(マキャヴェリ『君主論』第18章)

ニコロ・マキャヴェリ『君主論』(村上先生)

政治現象を科学的に分析、あるいは、冷徹とも言える眼で観察した史上初の古典的な名著。そこで述べられている政体の類型論といい、君主と官吏(主権者と非委託者)の関係性といい、ひょっ

としたら、かのマックス・ウェーバーの支配の類型や、近代官僚制論も、君主論がヒントになったと思われるフシがあり、そうした論点がこの本には散在している。ちなみに、「現代の君主」は、民主制下の市民であり、主権者であるあなたかもし

れない。

飯尾潤『日本の統治構造—官僚内閣制から議院内閣制へ』（長峯先生・小池先生）

政治や行政の在り方について分析、解説、提言の類は多いが、本書ほど広い層にインパクトを与えるものは少ないのではないか。「官僚内閣制」から真の議院内閣制へ——が筆者のメッセージである。それが説得力を持つのは政治学の理論と歴史、そして現実の政治過程についての豊富な知識に支えられているからであろう。政治や政府に関心を持つ人には必読と言える。国際比較の視点もあり、さまざまな角度から読めるであろう。政治や行政に関する「常識」は筆者によって、簡単に覆されてしまう。その知的挑戦には学ぶべきところが多い。

酒井哲哉『近代日本の国際秩序論』（柴山先生）

第1次世界大戦後から太平洋戦争敗戦まで、日本の国際政治学者たちは、どのように国際秩序を考えていたのであるか。すでに、大日本帝国陸軍のエリート軍人たちが、近代世界秩序としてのイギリスの世界支配、さらにウィルソン米国大統領による世界秩序像（その典型は国際連盟）を破壊し、新しい世界秩序を模索していたことはよく知られている。しかし、学者たちは、どう見ていたのであるか。いや、それ以上に、かれらは軍人たちの行動（侵略的軍国主義）を肯定する国際秩序像を提出していたのか、それとも、学者たちは軍人たちを学問でコントロールしようとしていたのか？ この重要な問題に答える前に、とにかく、酒井先生の研究は、東京帝国大学系の学者たちを中心に、かれらはまず世界をどう分析し、何をすべきと考えていたかを淡々と描いている。もちろん、西田を中心とする京都学派を無視して、上記の重大問題に答えることはできないにしても、酒井先生の研究は日本の学問と戦争という古くて新しい問題を考えるうえで不可欠である。

朝河貫一『日本の禍機』（小池先生）

こんな日本人がいたのかと感動を覚える書。筆者は米国の名門エール大学で教授を務めた日本人で、今から約100年前、日露戦争に関して日本の立場を米国に説明し、その後、米国など欧米世論

を踏まえて日本に自重するよう警告を発し続けた。当時の日本の状況を考えれば、これがいかに勇気のある行動か想像して余りある。現在、筆者ほどの知性と行動力を備えた人物はいるのだろうか。やや難解なところもあるかもしれないが、じっくり味わう価値がある。

五百旗頭誠編『日米関係史』（柴山先生）

『日米関係史』—これは、有名なペリー提督率いる米国艦隊が浦賀に来航してから今日に至る、日米関係を通史として概観したものである。この分野において、いろいろな日米関係史が書かれてきた。しかし、これほどの学者を集め、生きのいいすなわち学界の最先端の議論をふまえて、書いたものはすくない。執筆者たちは3年余の時間をかけ、何度も合宿までして書き上げたものである。日米関係を議論する前提として、この本ぐらいは読んでいないと、そもそも議論する資格があるのかと言われかねない。

戸部良一『日本の近代9 逆説の軍隊』（柴山先生）

これまで、近代日本の軍事史の通史といえば、藤原彰先生や小山弘健先生の研究が有名であった。ただ、書かれた時代をふまえると、左翼的な論調は避けがたいものであった。戸部先生の研究は、かなり中立的な立場から、しかも社会学的分析をふんだんに使用したものである。近代日本の軍事史を学ぶことは、近代日本を理解することにつづじる。よき出発点として薦めたい。

『The Speeches of Barack Obama』（今泉先生）

これは現第44代大統領に就任したオバマ氏のイリノイ州議会議員時代のスピーチから大統領になるまでのスピーチが収録されている。力強いメッセージが響き渡る。マーティン・ルーサー・キングを思い起こさせるような powerful speeches。日本の政治家には見られない素晴らしいスピーチ。これを聞いたら感動するに違いない。

Cornel West『Hope On A Tightrope』（今泉先生）

“Race Matters”の著者でプリンストン大学教授であるコーネル・ウェストが“Race Matters”の後、もう一冊のベストセラーを出版した。“Democracy Matters”であるが、この本の中で

彼はアメリカ社会に希望を見出すことができるのかどうかを問うている。それも実存的意味合いにおける希望を果たしてアメリカに、特に黒人や他の少数民族の中に見出せるかどうか。これをわれわれにつきつけている。これに対してオバマ氏は大統領としてどう応えるのか。また一般市民はどう応えるのか。これが問われている深い書である。ぜひ一読をお奨めする。

Cornel West 『Race Matters』(今泉先生)

この本はアメリカでベストセラーになった本です。学術書がベストセラーになることは非常にまれです。アメリカが公民権運動以来白人と黒人(アフリカン・アメリカン)の関係が良くなったという安易な考えを持っていた時に、ハーバード大学教授であった(現在はプリンストン大学)コーネル・ウェストがこの本を書いたのです。白人と黒

人の関係が良くなったというのは神話にすぎず、公民権運動以来、実は racism がひどくなったことを様々な例、政治、経済、文化および社会学の立場から説いたもの。アメリカに興味がある者には必読書。

James W. Loewen 『Lies My Teacher Told Me』(今泉先生)

アメリカ史がいかにうそにトンであるかを暴露した本である。アメリカの高校で使用されているアメリカ史のテキストをすべて網羅し、分析し、如何にアメリカ史がゆがんで教えられてきたか、つまりうそだらけのアメリカ史を告発し、正しいアメリカ史の教え方を教示した本である。アメリカ史に興味のある人にとって、有意義な書物となる。

* * * * *

「権勢と栄誉にまつわるこのような悪い面が、その良い面と同じくらいに外面にあらわれていれば、権勢と栄誉を求める理由は、一つのことを除いては、なくなってしまうだろう。その一つというのは、人々が名誉を与えられ、敬意をはらわれるようになればなるだけ、ますます神に近づき、ほとんど神に一致した存在となるように思われることである。人間として、誰が神に似ることを望まぬ者があろうか」

(F・グッチャルディーニ『フィレンツェ名門貴族の処世術』より)

ミルトン・フリードマン 『資本主義と自由』(長峯先生)

大学2年の時、当時、大学はまだ教養課程と専門課程に分かれていたのだが、専門課程で履修した最初の講義が「社会科学入門」。その講義を担当されていた、当時、大学院を出たばかりの血気盛んな先生が、(その先生は社会学が専門であるにも関わらず) 経済学の本を右寄り、真ん中、左寄りからということで3冊紹介してくれた。思想的にバランスをとることを意図されたようである。その右寄りとして紹介されたのが、フリードマン『資本主義と自由』(当時、マグロウヒル好学社)である。真ん中がサムエルソンの『経済学』(岩波書店)、左寄りがロビンソンの『現代経済学』(岩波書店)であった。

この中から私はまず、由緒ある教科書のサムエ

ルソンの『経済学(第10版)』を読み始めた。教養課程でマルクス経済学に依拠した経済学概論の講義しか知らなかった私にとって、この本は経済学が目覚めるきっかけとなった。現実を理解する道具として、経済学が実に生き生きと感じられ、読み進むことに興奮した覚えがある。“収穫逡減の法則”という響きだけでも刺激的であったが、それ一つ説明するのに実に5ページも割くという、実に贅沢な教科書であった。

次いで手にしたのが『資本主義と自由』。この本には、頭をガツンと殴られる思いがした。それまで、政府が社会を規制するのは当たり前と思っていたのだが、政府が政策をとることでむしろ世の中が悪くなる可能性もあることを指摘し、医者でさえ国家試験は必要なく、市場の評価に任せてはどうかといった提案は、実に衝撃的であった。

フリードマンには、その後、一般啓蒙書としてベストセラーにもなった『**選択の自由**』（日経ビジネス人文庫）という同類の本もあるが（そちらでもよいと思うが）、私としては思い出深いこちらの本をお勧めしたい。

最後に、左寄りというロビンソンの『**現代経済学**』を読もうとしたが、こちらは数ページ進んで、あえなく挫折。もっと易しい本をと紹介された『**異端の経済学**』（日本経済新聞社）に挑戦したが、こちらは一応最後まで読んだ痕跡はあるものの、内容は頭に残っていない。ということは、理解できなかったということであろう。現在この2冊を眺めてみると、ケインズ経済学をある程度理解した後で、その批判を含んだ研究書として読むべき本であることが分かる。

ということで、私も経済学の本から、右・真ん中・左と1冊ずつ紹介したかったのであるが、フリードマンの本は、初級者向けとして適当、また復刻版が出ているということで、推薦することにした。サムエルソンの教科書は上・下があり、私も読破するのに1年を要した大著である。ロビンソンは入門書として不適切ということで外した。ただ、フリードマンだけだとバランスに欠けるという思いもあり、ケインズ関係の本を1冊推薦している。そちらも参照されて、この2冊はセットで読まれることをお勧めしたい。

伊東光晴『現代に生きるケインズーモラル・サイエンス』（長峯先生）

経済学を勉強すれば、自ずとケインズという名前には直面するだろう。私が大学2年のときに履修した「英書購読」の先生は、ケインズの『**雇用、利子および貨幣に関する一般理論**』（東洋経済新報社）をテキストに使用した。単にクラスで割り振られたので、たまたまである。ケインズの『一般理論』を、英語も経済学も分かっていない学生に読ませるのは、かなり無茶な行為である（もちろん読んだのは、ほんの一部であるが）。すでに日本語訳があるため、訳文は分かるが、その訳文を見てもほとんど意味が理解できない。ケインズの『一般理論』はそれほどに難解なことである。

そこで、『一般理論』をさらに解説した本に当たらなければならず、当時ケインズ理論の解説書と

して有名であったディラード著『**J.M.ケインズの経済学**』（東洋経済新報社）を読もうとした。しかしそれもまた難しく、伊東光晴著『**ケインズ：新しい経済学の誕生**』（岩波新書）に辿りついた。

今回、伊東先生の本を挙げた理由はそれだけではない。その後、研究者となった私は、学会等で伊東先生のお話を聞く機会に何度か恵まれた。伊藤先生の魅力は、なんといっても“伊東節”と言われたその弁舌にある。実は私自身は、理論的にケインズ経済学に与しているわけではないのだが、伊東節だけは特別であった。その伊東先生の本（弁舌までは伝わらないかもしれないが）を、ぜひ読んでほしいとの思いで、『ケインズ』のニューヴァージョンと言える『**現代に生きるケインズ**』を推薦することにした。

このエピソードにはもう一つ後日談がある。私は1990年に米国・メリーランド大学に留学していたが、あるパーティで声をかけてきた老人が、歴史的人物と思っていたディラード先生であり驚愕した覚えがある。日本のG N Pはどの位になったかと質問されたので、世界第2位になり（もうすぐ中国に抜かれて3位になるが）、一人当たりG N Pでもアメリカに並びつつあると話をしたら、向こうが驚愕している様子であった。そして私が留学中に、ディラード先生はお亡くなりになった。

宇沢弘文『自動車の社会的費用』（齊藤先生）

著者は、大学で数学を研究していたが、日本の敗戦からの復興に貢献しようと経済学に転向した高名な経済学者。といっても推薦本に数式はいっさい出てこないのが安心を。

自動車を使う人は車やガソリンにお金を使うが、実は自動車のコストはそれだけではない。大気汚染や騒音、事故による死傷の発生、そしてかつて子どもたちの遊び場であった空間が奪われていく。著者は、このようなコストに十分な注意が払われないのは、そもそも経済学の基本的な発想、理論構造に問題があるのではないのか、と提起する。

1974年に出版され、現在まで読み続けられているロングセラー。道路の構造は当時より格段に改善された。排気ガスもずいぶんきれいになった。しかし自動車利用に適合した都市構造は、かつての商店街をシャッター通りに変え、病症はさらに深く進行しているともいえる。なにより著者が当

時問題とした経済学の考え方が、当時とは比べようもないほど今日の政策決定全般に大きな影響力を行使しているのである。

竹内靖雄『経済倫理学のすすめ』(古川先生)

本書は、「限られた財を人々にどう公平に配分するか」を扱っています。公平の概念は非常に解釈が難しく、それを考える人それぞれ内容が違ふと思われまふ。希少財の分配を扱う経済学の領域を対象として、それを倫理的にどのように対処すればいいのか、倫理という人々の感情を勘定の視点から考えるにはどうすればいいのかをやさしく解説しています。

伊丹敬之『場の論理とマネジメント』(古川先生)

グローバルレベルの経営の標準はアングロサクソン型の経営です。ただ、昨年来の米国発金融不況の状況を見ると、アングロサクソン型の経営が万能薬ではないことがはっきりしました。本書は、日本型経営の特徴を「場」という概念で紐解き、日本企業の強みの所在を解説しています。

高橋伸夫『虚妄の成果主義』(古川先生)

日本の企業に成果主義による人事評価システムが導入されてからかなりの時間が経っています。しかし、それがうまく機能しているという話はほとんど聞きません。本書は、日本型の人事システムの本質を仕事の内容で報いるシステムであると述べ、安易な成果主義の導入に警鐘を鳴らしています。

山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』(古川先生)

日本の社会は、元来、安定した社会関係や人間関係に基づいた安心社会だといわれてきました。しかし、リストラや転勤、暴力事件の頻発など安心社会を脅かす事項が多数出てきました。このような状況では、日本にも不信の文化が育ってしまうことを懸念した著者が、新たな信頼の文化を育てるためにどうすればいいのかを本書で述べています。

『日本の論点』編集部編『10年後の日本』(中條先生)

文藝春秋社から毎年発行されている『日本の論

点』をレポート作成など際して利用した人は多いでしょう。本書は『日本の論点』編集部が集めた豊富なデータを用いて47項目の社会的な課題を選び、その現状と将来展望について分かりやすく解説しています。「家族の絆と子どもの未来」「漂流する若者たち」など身近なテーマから「不安定化するアジア」「グローバル経済の本流」「地球環境の危機」などのグローバルな視点まで幅広いテーマを各章で展開しています。2005年末に発行されているのでデータなどが最新のものではありませんが、新書版で読みやすく、幅広い分野の課題研究の導入に適した本です。

青木雄二『ナニワ金融道：ゼニのカラクリがわかるマルクス経済学』(村上先生)

お金という怪物は、社会における人と人の関係を、また人と社会の関係をどのように形成しているのであろうか。本書は、原作『ナニワ金融道』のマンガの一部を添えることでお金を介した現実の姿を分かり易く記述・解説している。人の意思とは関係なく「お金の論理」は、あなたとあなたの周りの人達を否応なしに、金銭トラブル＝人間関係を疎外することに、巻き込むかもしれない。現代に通じる資本主義の理解に役立つ初期マルクス「疎外論」の絶好本。

山田昌弘『希望格差社会』(中條先生)

総合政策学部の学生で「格差社会」という言葉を知らない人はいないでしょうが、その実体については十分に理解していない人も多いのではないのでしょうか。この本の著者は東京学芸大学教育学部の教授で「パラサイト・シングル」という言葉(知っていますか?)を生み出した社会学者です。格差社会という一般的なには「所得格差」「教育格差」などをすぐ思いつきますが、これらの格差が拡大していく中で将来に希望が持てる人と、将来に絶望している人が分裂していく社会が「希望格差社会」であると著者は論じています。2004年に発行されて大きな反響を呼んだ本ですが、現在でも多くの示唆を与えてくれる本です。

安部彩『子どもの貧困』(亀田先生)

著者は母子家庭の母親に対するアンケートの回答に触れ次のように訴える。

「子供のために早く死にたい」と、母親に言わせる社会は許されるべきではない」

私は総合政策学部に着任してすぐに、本学部の多くの学生に妙なイメージが形成されていることに気づいた。それは「日本の子供は恵まれている」という幻想である。多くの学生がアフリカなどの貧困国の子供たちを見てかわいそうだという。しかし、そのときに必ず「私たちは何も困っていないのに」という接頭辞がつく。こういった発言を聞いたたびに、私は幾許かの怒りを感じている。ここまでくると「無知は罪」だ、と。

母親と 20 歳以下の子供だけからなる母子家庭の相対的貧困率は実に 66% に上る。相対的貧困率とは著者の計測によると調整された一人当たり所得が 127 万円以下の世帯である。この「調整された一人当たり所得」というのは世帯あたりの手取り収入を世帯人数の平方根で除した値である。よって、例えば母一人子一人の家庭の 3 件に 2 件は手取りの所得が 179 万円以下だということだ。

だから皆さんにこうして欲しい、とまでは言わない。せめて本書を読んで欲しいと願っている。

FL・アレン『オンリー・イエスタデイ—1920 年代・アメリカ』（高畑先生）～とるにたらぬことから、真実を見抜くには～

アメリカ合衆国の 1920 年代、“ローリング・トゥエンティーズ（狂騒の 20 年代）”、この時代に生きていた人々にとっては、それ以前の“古き良き時代（ベル・エポック）”に二度と戻ることができないなど、気付きようもありませんでした。彼ら／彼女らは我知らず、ジャズと（禁酒法下であるにもかかわらず）アルコールにひとしきり熱狂します。

その怒濤の日々が 1929 年の大恐慌によって幕を下ろしたばかりの 1931 年 6 月、FL・アレンは「ほんの昨日のこと」を分析します。彼の解釈と描写が見事なことは、今日、1920 年代を取り上げる著作の多くが、結局、本書をなぞるだけに終わっていることから明らかです。アレン自身は序文で「時間が経過するにしたがって、私の判断や解釈の多くが、近視眼的なものに過ぎなかったことも明白となろう」と謙遜しています。しかし、ほぼ 80 年後の現在、我々はこの本によって、第一次大戦を経て、他国で戦う悪夢（このテーマを扱った傑作の一つが、E・ヘミングウェイの『武器よさらば』です）から覚めたアメリカ人が“赤（共産主義）”の恐怖に怯える様子を知りますが、一方、若者たちはそれまでの道徳をあざ笑い、短いスカートと断髪、口紅が流行します。アメリカ人たちは自動車、ラジオ、水着、スポーツ（1921 年のヘビー級ボクシング世界タイトルマッチ、デンプシー対カルパンチェ戦は興業収入 100 万ドルを突破）、麻雀、そしてスキャンダル（マス・ジャーナリズムの勃興期に重なります）に熱中します。若き寡黙な英雄“空飛ぶ馬鹿”ことリンドバークがニューヨークーパリ単独飛行に成功するかと思えば、皮肉なジャーナリストのメンケンが『マーキュリー誌』で毒舌をふるってインテリを魅了し、シカゴ・ギャングがアルコールを武器に社会に食い込む。そのあげくにウォール街の“強気相場”が大恐慌で崩壊する様子を、何時でも、何処でも、追体験できます。この優れた“年代記”は、とるに足らぬことから、そして何かに熱狂する人々の日常から、その奥に潜んでいる真理を見抜く術と力を、皆さんに教えてくれるでしょう。

* * * * *

ドウダイ鉈毒はドウダイ・・・山を掘ることは旧幕時代からやって居たことだが・・・手の先でチョイチョイ掘っていれば、毒は流れやしまい。

今日は文明だそうだ。文明の大仕掛けで山を掘りながら、その他の仕掛けはこれに伴わぬ、それでは海で小便したとは違はうがね・・・わかったかね・・・元が間違っているんだ。

（勝海舟『水川清話』明治 30 年、公害問題の原点として知られる足尾鉈毒事件（そしてその裏にある明治政府の近代化政策全般を）を批判する発言→関根先生ご推薦『谷中村滅亡史』を参照）

イエーリング『権利のための闘争』（関根先生）

ドイツの著名な法学者イエーリングの古典的な名著で、最も多くの法律関係者に読まれ、今なお輝きを失っていない必読書。

権利は、上から与えられたものではなく、闘争によって勝ち取られてきた歴史を力強く論証する。権利のための闘争こそ法を生み出す原動力であることを説く。

ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利—環境倫理の文明史』（関根先生）

これまでの環境思想を歴史的に概観し、現在進行中の「緑の革命」が人間社会のあらゆる分野への大変革を迫り、21世が記念すべき環境の世紀として、従来の人間中心主義から生命中心主義へのパラダイムシフトが図られる必然性を予言したものの。

三橋規宏『環境経済入門（第3版）』（長峯先生）

私は、もともと公共経済学・公共選択論を専門にしている。しかし10年位前から、少しずつ環境にも関心を広げてきた。もちろん世の中、環境問題が深刻化し、その政策への関心が高まってきたことも背景にあるが、加えて個人的な思いもある。それについては、もう1冊の推薦書『日本汽水紀行』の方を参照願いたい。

さて、公共経済学の中心概念の一つに“公共財”がある。環境という資源はまさに公共財の性質をもつ。私は公共経済学の中でも、もっぱら公共財のことを研究してきたことから、公共経済学から環境経済学への流れは、応用分野への発展としてごく自然である。そして2年前からは、当学部でも環境経済学の講義を担当している（今年で3年目）。教員生活も20年以上になるが、環境経済学という科目は初めてである。実は、理論についてはさほど心配していなかったが、環境問題の実態や現実の政策に関する知識という点では、教えることに懸念がなかったわけではない。その意味では、私も学生と一緒に勉強しながらの講義である。

そうしたときに、入門書として、実態、歴史、政策、法体系、基礎理論、展望と実に広くバランスがとれているのが本書『環境経済学入門』であった。さすが第3版が出るほどに売れている本である。この本を読んでから、私の3年生開講の環境経済学に来てくれれば、本当に授業がしやすい

だろうなあ、という点からもお勧めである。元・日本経済新聞社におられた三橋先生には、その当時に書かれた『ゼミナール日本経済入門』（日本経済新聞社）という名著もある。こちらの本も、併せてお勧めしたい一品である。

畠山重篤『日本＜汽水＞紀行—森は海の恋人の世界を訪ねて—』（長峯先生）

私は宮城県気仙沼市で育った。私のアイデンティティはどこから来ているかと尋ねられれば、それは気仙沼にいた幼少期の頃だと答える。といっても、そのことを強く意識するようになったのは、40歳を過ぎてからである。

気仙沼はリアス式と呼ばれる入り組んだ海岸の港町である。近海や遠洋漁業の基地であり、湾内では帆立、牡蠣、赤貝、海苔などの魚介類の養殖が盛んである。その気仙沼湾で、1980年代に赤潮が頻発し、魚介類も減少し始めた。それを見た養殖漁師の畠山氏は、何が原因かと思ひめぐね、結局、川の上流の森林が荒廃していること、海の資源を維持するには、川の上流域の広葉樹（の落ち葉）が重要であるという結論にたどり着き、20年ほど前から山に植林を始めた。それが、漁師たちの“森は海の恋人”運動であり、その活動はいまや全国に広がった。

私も、故郷でのこの活動を眺めながら、40歳を過ぎた頃から故郷への思いがふつふつと強くなっていく中で、植林問題は自分の専門とは無関係かと思っていた。しかしある時、森・川・海をつなぐ政策は、まさに自分が研究テーマとして取り組んできた“行財政改革”と深く関連していることに気づき、それからは故郷とのつながりを感じながら、森・川・海の関連や“流域”に関する勉強に取り組んできた。いまでは流域マネジメント、流域ガバナンス、水資源経済学といったことが、私の新しい研究領域になりつつある。

畠山氏は、今では漁師作家としてかなり有名になり、著作物も多数ある。彼の活動の原点である『森は海の恋人』（北斗出版）も読んで欲しいが、やや格調が高く難しいため、初めての人には日本エッセイスト・クラブ賞（2004年）を受賞した『日本汽水紀行』をお勧めしたい。これは気仙沼に限らず、日本のあちこちで、川と海の水が交じり合う“汽水”域、最近では“里海”という言葉もよ

く聞かれるが、そこにわれわれ日本人の生活の原点、自然資源の宝庫があることが紹介されている。牡蠣が好きな人には、『牡蠣礼賛』（文春新書）もお勧めしたい。

F・ピアス『水の未来 世界の川が干上がる時あるいは人類最大の環境問題』（今井先生）

平素から人の意識に上る機会が多くはないが、地球上の水の問題は深刻かつ緊急なものである。本書は世界各地の水に関わる諸現象をレポートし、問題点を整理して読者に注意を喚起している。そして私たちが地球人の未来に向けて資源としての水をどのように考え扱っていけばよいのか考える際に、大きなヒントを与えてくれるのである。

池谷和信『地球環境問題の人類学 自然資源へのヒューマンインパクト』（今井先生）

わが国における気鋭の研究者たちによる、地球環境問題の本質に迫る書物である。世界各地における森林破壊、砂漠化、野生動物保護問題やその他の環境問題について、マスコミ等が報じるステレオタイプ化された情報だけでは読み取れない人と自然の関係の本来の姿が描き出されている。環境人類学に関心を持つ人にお勧めしたい。

飯島伸子『環境問題の社会史』（今井先生）

本書では、環境問題と人間社会はどのように関わり合ってきたのかについて、時代ごとに追跡し問題点を論じている。江戸時代から現代に至る日本の社会・経済的变化を、多くの事例を通して跡づけ時代を通して変わらぬ社会関係にメスを入れたものである。日本の公害問題を理解する上で、絶好の入門書といえる。

農文協（編）『江戸時代に見る日本型環境保全の源流』（今井先生）

本書は、今から200年前すでに世界的な大都市の1つであった江戸が、当時の諸外国の大都市（ロンドンなど）に比べて格段に資源循環型で衛生的であった、という事実を多方面から論じている。200年間以上にわたり、経済的な発展を遂げるとともに持続可能な資源利用システムを維持していた江戸時代は、地球上の資源利用・活用システム

の確立に向けて、私たちに大きなヒントを与えてくれるであろう。

荒畑寒村『谷中村滅亡史』（関根先生）

足尾鉾毒事件の解決と称して加害企業でなく無辜の谷中村住民に対し、土地収用法による生活用地の没収がなされ、谷中村全体が権力によって弾圧・破壊された。この許すまじき権力の横暴を白日の下に曝した社会科学上腐朽の名著。

ローリー・ギャレット『カミング・プレイグー迫りくる病原体の恐怖（上・下）』（安高先生）

新型インフルエンザが4月にメキシコで流行してから「世界的大流行（パンデミック）」宣言がなされるまで僅か2ヶ月ほどしかかからず、現在（7月1日）では世界120カ国において流行している。このように、人や物が地球的規模で、かつ短期間で行き来する現代では、新興感染症の出現を「どこか遠い国の出来事」として無関心でいることはできなくなった。『カミング・プレイグ』は、こうした人や物の移動に伴う新たな疾病出現の実態や脅威を描き出すと同時に、アメリカCDC（疾病予防管理センター）を中心に行われた対策とその限界を伝えるドキュメンタリーである。話の舞台は世界各地にまたがり、加えて、文化、社会、政治、経済など様々な観点から問題が掘り下げられている。大著ではあるが、飽きさせないし、引用文献リストが添付されているので深く調べることも可能である。『沈黙の春』と同様、その時代の課題を的確に指摘している良書としてお勧めする。

地球環境研究会（編集）『地球環境キーワード辞典』（客野先生）

現在の地球環境問題に関連する様々なトピックがポイントを押さえて整理されている。地球温暖化のメカニズムやこれにまつわる世界の動きなども、限られたページの中で簡潔に要点がまとめられている。辞書的に使用すると、環境にまつわる研究やレポート作成に役立つので、総合政策学部で環境分野に関心がある学生にはぜひ目を通しておくとともに、環境に関する事項を調べる際のきっかけとしても使用していただきたい一冊である。

J・ジェイコブス『アメリカ大都市の死と生』(室崎先生)

建築家や都市プランナーが、観念的に思い描き作り出したニュータウンや都市開発が、いかに反文明的なものであるかを、アメリカの大都市の実態をもとに鋭く解明したモダニズム批判の書である。出版されてから50年になるが、いままもアメリカはもちろんのこと日本においても多くの人々に読まれる隠れたベストセラーである。今日のニューアーバニズムの「生みの親」と位置づけられる本書は、21世紀の都市のあり方をめざす学生にとって、バイブルであるといつて過言ではない。

オグスタン・ベルク『日本の風景・西欧の景観～そして造景の時～』(客野先生)

日本人と西洋の人々の空間認識や空間造作の根源を“風景”と“景観”というキーワードに基づいて解釈しようとする試み。日本の建築や造園は西洋のそれと大きく異なる。それは空間の捉え方が異なるからである。西洋の建築や庭園では、遠近法や対称性が重視されるのに対して、日本ではむしろ回遊式庭園に代表されるように移動する視点が重視される。多くの事例が紹介されているので、庭園巡りをする前に読んでおくと、楽しみがもっと増すかもしれない。

西村幸夫編『公共空間としての都市』(室崎先生)

公共性が厳しく問われる現代において、そのあり方を都市空間に即して具体的に論じたもので、未来に向けての都市政策の羅針盤ともいえるべき書物である。コモンズやソーシャルキャピタルという新しい概念、共同性や場所性という新しい視角、安全安心や歴史文化といった重要な課題を、各界の第一人者が鋭く解説しているので、ワクワクした気持ちで読み進めることができる。なお、安全安心の部分は総合政策学部の室崎が執筆している。

西村幸夫編著『路地からのまちづくり』(室崎先生)

都市における近代主義の限界をいかに打ち破るかが、まさに現代において問われている。その解

決の糸口を、ゴミ溜めのように否定されて来ていた路地に見いだそうとする、未来に向けての提案書である。路地には、ヒューマンな生活空間が息づいており、賑わいや設えの空間が演出されている。こうした路地のもつ「界隈の魅力」を保全・再生しつつ、これからのまちづくりに活かしていく必要性やチャレンジスピリットを、熱く問いかけている。問題の解決手法を提起する。

イーファー・トゥアン『トポフィリアー人間と環境』(客野先生)

この書籍の中で、人間と空間を結びつける新しい概念の一つとして著者はトポフィリアを提唱している。トポフィリアとは場所に対する愛情を意味する造語であるが、このトポフィリアに基づく人間と場所の関係性の解釈が斬新であり、空間計画や空間設計に携わる者に対して設計や計画のための新たな指針を提供してくれる。もちろんそのような分野に携わらないという人にとっても、まちあるきや旅行が好きな人にとってはその楽しみを増やしてくれる一冊でもある。

ET・ホール『かくれた次元』(客野先生)

“他人の距離”や“恋人の距離”、テレビや雑誌で目にすることが多い話題であるが、この理論のルーツはこの書籍にある。著者は、動物はそれぞれ“領域”を有しており、その領域を侵害されると攻撃的行動にでたり、逃避的行動にでることを指摘している。そして同じような領域性が人間にも備えられていることを指摘している。翻訳者の日高先生は動物行動学の第一人者で、生物に関する蘊蓄も豊富で、しかもその視点はとてもユニークな科学者であるが、この書籍は建築分野の者にとっても必読書である。すなわち空間設計においては、人間が快適と感じる距離感を把握していること、これはとても重要なことである。

コリン コバヤシ『市民のアソシエーション・フランスNPO法100年』(中野先生)

みなさんは市民社会という言葉を知っていますか。市民とは何かについて考えてみたことがありますか。「いいえ」と答えたみなさんはい

ずれ『市民または市民社会』という言葉は何回かこの学部で聞くことになります。出発点は1789年のフランス革命です。市民が結社を作って争うと社会的損失になります。そこですべての結社が禁止された時代があります（ル・シャブリエ法）。その後、1901年になって市民の結社の自由が認められるようになります。このコリン・コバヤシさ

んの『市民のアソシエーション—フランスNPO法100年』は、たくさんの研究者の論文を集めたものですが、こうした市民社会の出発点とそれから100年たった2001年にフランスでもう一度市民の結社（アソシアシオン）について国を挙げて熱く語られたことの記録になっています。

* * * * *

「かしこい兄弟たちよ。信仰の心をもって耳傾け、おまえたちが白人（パパラギ）の持つような悪意を持たず、白人が怖れることを怖れずにいるのは幸せだと思わねばならない。（中略）丸い金属と重たい紙、彼らがお金と呼んでいる、これが白人の本当の神さまだ。

愛の神について、ヨーロッパ人に話してみるがよい—顔をしかめて苦笑いするだけだ・・・ところが、ぴかぴか光る丸い形の金属か、大きい重たい紙を渡してみるがよい—とたんに目は輝き、唇からたっぷりよだれが垂れる。お金が彼の愛であり、金こそ彼の神さまである」

（ツイアビ『パパラギ』より）

“England expects that every man will do his duty”

（英国は各員がその義務を全うすることを期待する）

（ホレーショ・ネルソン提督、トラファルガー海戦の信号旗）

明石康他編『日本と国連の50年』（園田先生）

1956年に日本が国連に加盟してから50年の節目にあたり、日本を代表して、あるいは国連諸機関の責任者として活躍した方々の講演を収録しています。それぞれの講演に先立ち、時代背景について解説があり、講演後には質疑応答が行われています。各人の貴重な体験は、国際社会に貢献することの意義や困難について考えるうえで、たいへん示唆に富んでいます。編著者のお一人である高須大使は、総政のリサーチ・コンソーシアムや国連セミナーでもお話してくださいました。

庄司克宏『欧州連合一統治の論理とゆくえ』（園田先生）

毎日のように新聞やTV等マスメディアに登場するEU（ヨーロッパ連合）は、誰もが知っているようで案外わかりにくい機構の一つです。この本は、すでに日本語で数多く出版されている文献の中でも、EU研究者が一般読者向けに書いたもので、ヨーロッパに関心のある学生さんの必読書です。EUの実態について、設立の経緯、組織構

造と運営、活動の多様化などを中心に学ぶことができます。また最終章では、東アジアの経済統合との関連で、地域における日本の役割にも言及しています。

羽場久美子・増田正人編『21世紀国際社会への招待』（園田先生）

今後どのような専門分野に進むにしても、国際社会についての基礎知識は必要です。この本は、総勢23名の執筆陣が、さまざまな研究領域（国際政治・経済、社会学、環境学、地域研究、近現代史など）から国際的な諸問題を詳しく解説した入門書です。各章は簡潔で読みやすいので、まず第I部（第1～5章）で、現在の国際社会がどのように形成され発展してきたかについて理解を深めたいと、興味のあるテーマから読み進めるとよいでしょう。巻末の「国際社会キーワード200」も、活用してください。

アマルティア・セン『人間の安全保障』（亀田先生）

著者アマルティア・センは1998年にノーベル経済学賞を受賞した経済学者であると同時に、ケンブリッジ大学時代には哲学教授も勤めた人物です。彼の関心は貧困や不平等にあり、効率性の話に偏りがちな経済学研究に対して分配の公正について厳密な議論を展開しました。

この『人間の安全保障』は8本の小論で構成されており、特に「人間の安全保障」という概念についてわかりやすい説明が施されます。特に国際政策学科への進学を目指す人には必読の書。

B・アンダーソン『想像の共同体』（斉藤先生）

「国連」は、いうまでもなく”the United Nations”。では、「ネーション」とは何か？ 著者は「国民（ネーション）とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と定義する。国民という概念は国家が創りだし、人々に押しつけたものではない。「たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれ」、「数千、数百万の人々が、かくも限られた想像力の産物のために、殺し合い、あるいはむしろみずからすすんで死んでいった」。

推薦本は、この国民という概念が、いつ、どこで、どのようにして生まれたのか、を明らかにしたもの。どこで生まれたのか？ 「欧州」と答えた人は間違い。正解は読んでのお楽しみ。上質な推理小説を読んでいるかのような知的興奮。読後しばらくはアンダーソン・マジックの術中から逃れられない。

鶴見良行『バナナと日本人』（鈴木（實）先生）

バナナを通して、フィリピンと日本の間の社会・経済関係を社会科学的アプローチであぶりだした名著である。この本はなかなか読みきれない。新書なのに手ごたえがありすぎる。しかし読後はきっと他の視点でものを見ている自分に気がつくであろう。

ツイアビ『パパラギ—はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』（高畑先生）～“見られている者”が見返す時～

少し耳慣れない題名ですが、この本は太平洋の西サモア、ティアベアに住む“酋長”ツイアビがヨーロッパを回り、そこで出会った“パパラギ(=白人)”たちの生活、行動、社会等、文明社会に感じた思いを、帰島後、人々に訥々と語りかける演説集です。例えば、「(パパラギが)物がたくさんなければ暮らしてゆけないのは(心が)貧しいからだ」。

言うまでもなく、この物語は、白人たちが“未知の世界”に出かけて“未開人”と出会う、という筋書きの裏返しであり、“近代”への鋭い批評・異議申し立てなのです。

授業でも時折触れることがありますが、「アフリカの人たちは、ヨーロッパ人を“人喰い人種”だと思っていた」という話があります。“奴隷貿易”によって同胞が海の彼方に連れ去られ、しかも、誰も戻ってこない。ヨーロッパ人は何のために彼らを連れて行くのか？ 「そうだ、彼らは人喰い人種に違いない！」とアフリカ人たちは考えます。

しかし、我々はいまだに“未開”の人々に接する際に、無意識のうちにも、欧米の“文明人”的視線そのままに彼らを見てしまいがちです。こうした“文明人の傲慢さ”は、すでに18世紀、フランスの啓蒙主義思想家D・ディドロが『ブーガンヴィル航海記補遺』（岩波文庫）で、20世紀ではパレスチナ出身の歴史学者E・サイードが『オリエンタリズム』（平凡社ライブラリー）で批判しています。しかも、実を言えば、彼らも我々を見ている！ 『パパラギ』こそ、“見られている者”が“見る者”を見返す際、そこに浮き上がった近代文明の光と影をあらわにする、そんな書物なのです。

レヴィ=ストロース『悲しき南回帰線(上下)』（高畑先生）～人類学とは何か？～

1934年のパリのある日曜日、エコール・ノルマル（高等師範学校）学長S・ブーグレから突然「ブラジルでの民族学調査に参加しないか」と持ちかけられた人類学者C・レヴィ=ストロースは、勇んで現地に赴きます。しかし、そこで直面したのは、先住民に会いたければさらに南米大陸の奥深く、遙かな僻地“ロンドニア”に出かけねばならないことでした。

彼は荒野で、ナムビクワラの人たちについて書

き記します。「生活の無一物状態はほとんど信じがたいほどだった。男女ともに一物も身にまとっていない」「夜明けとともに起きて、火をもやし、何れともあれ夜なかの寒さに冷えた体を暖め、それから前夜の残り物で軽く食事をする」「仕事といえばおしゃべりがおもで、いつでも陽気で、よく笑う。冗談をとばしたり、ときにはみだらな話や糞便の話をして、そんなときにはどっと笑いこぼる」「(一日の終わりに) 明るく輝きはじめたなつかしい火のまわりに、家族の集まりができる。夕べの集まりは、話や歌や踊りのうちに過ぎていく。ときには、これらの楽しみが夜遅くまでつづくことがあるが、たいていはすこしばかり痴話げんかや友だち同士の争いがあったあとで、夫婦はしっかりと抱き合い、母親たちは眠っている子を抱きしめ、あたりは静寂に還り、寒い夜はタキギのはぜる音と、タキギをくべる者の足音と、犬の吠え声、子供の泣き声に、ときおり生気をとりもどす

だけだ」。

フランスから地球を半周ほども旅することになったフィールドワークは、10年の熟成の日々の後、構造主義人類学の幕開けとなる『**親族の基本構造**』として脱稿され、さらに6年の間において畢生の傑作『**悲しき南回帰線**』に結実します。出版時、フランス最高の文学賞、ゴンクール賞委員会は、この書が“小説”の形で出版されなかったことに、遺憾の意を表したと聞いています。そのレヴィ=ストロースは、18世紀の思想家J・J・ルソーこそ「自分以外の人間を知ることにより自分を知らうとした最初の人間である」=人類学の始祖と称えています。つまり、人類学とは“自己”と“他者”を比べるうちに、“自己”を理解する業なのですが、これはもちろん『**パパラギ**』と同じ構図です。南海の島ティアベアに住む“酋長”ツイアビは、立派に人類学者なのです！

* * * * *

「じっと見つめていられぬもの、太陽と死と」

(ラ・ロシュフコー『箴言集』)

「返礼ができぬほどよく

私を助けてくれた友は一人もいなかった。

また、返礼ができぬほどひどく

私を痛めつけた敵も一人もいなかった」

(スラの墓碑銘、モンタネリ『ローマの歴史』より)

J. M. Roberts『**The Penguin History of the World**』
(鈴木(英)先生)

Oxford 大学の MJ・Roberts 教授の手による『**ペンギン世界史**』(The Penguin History of the World, Penguin Books 1995) を手にしたのはワシントン D. C. の空港であった。多分、2001年の春ごろだと思う。仕事が終わりマニラに帰る長いフライトの時間を有効に過ごそうと考えて本屋をあさり求めたのがこの本であった。

飛行機の自分の席に着くなり、本を読み始めた。何と言う本だ！これはスリラー小説ではない。なのに本を置く事が出来なかった。成田までずっと読み通した。隣のアメリカ人が、「何をそんなに夢中になって読んでいるのか」と言ってきた。「この

歴史の本は素晴らしい。この地球上の人類の歴史を太古から現代まで、すごく読みやすく、でも読んでいる者を離さず、ずうっと物語の中に引き込んで行くんだ。「そんなこと言うっても歴史の本なんだから他の本と同じで、無味乾燥で時代を追って行くだけだろ」。

そうではない。この本はまさにグローバルな視野と重要な出来事を漏れなく横の関係を正確に押さえながら叙述を展開してゆく。その包括性には脱帽する。混乱する世の中、社会の発展・変革、権力闘争と、その権力者の交代、文化・文明の興隆と衰退を経て出来上がってきた我々の現代を絶え間ない過去の大きな流れの中で捉えてる。ぜひ、皆さんに読んでもらいたい。

E・H・カー『歴史とは何か』(小池先生)

徳川家康でも豊臣秀吉でも、ナポレオン皇帝でもよい、歴史上の人物を考えてみよう。彼らについて書かれていることは、本当に事実なのか。いろいろ書かれていることの、どこに真実があるのか。そもそも「事実」とは何なのか——。こうした疑問に、筆者は丁寧に答えてくれる。筆者は歴史家だが、その指摘は、多くの 学問分野に参考になりそうだ。難解なところもあるが、何度も読むうちに筆者の思いが伝わってくるであろう。本書はケンブリッジ大学での講演がもとになっている。その翻訳の素晴らしさも味わってもらいたい。

プルターク『プルターク英雄伝』(尾藤先生)

「対比列伝」が元の書名で、古代ギリシャと古代ローマの著名人を似たもの同士を対比して論評した伝記ものです。

推薦する理由は、

- 1 個性的な実在の人物を歴史的場面の中で描いているわけですから、ともかく面白いです。
- 2 人生の教訓を学ぶのに役立ちます。これからの人生が定まっていないう若者にとって、時代が異なるとはいえ人間社会は変わりないですから、彼らの生き様を知ることは、特にためになるでしょう。
- 3 欧米の人たちにとっては、この本に描かれた人物や歴史上の出来事は一般的な教養であり、いわば常識化しています。

これから海外で活動しようという若者として、欧米人との親しい交流をする上で、この本を読んでいることは恥ずかしいことでしょうか。

I・モンタネッリ『ローマの歴史』(高畑先生) ～“政治”とはどんなアルテ(ラテン語で“芸術／技”)なのか?～

“まつりごと”に身をおくことに、人々はどのようにして喜びと怖れを感じるのか? 古代ローマ人にとって、政治(とその延長線上の戦い)はきわめて自然で、例えば朝食をとるように、ごく当然のことでした。先達としてのギリシア文明に惹かれ

つつも反発しながら、ローマ共和国／帝国は「普遍」と「現実」とを踏まえて、世界初の国際帝国を作りあげます。著者のモンタネッリは軽妙な語り口で、その栄枯盛衰を語ります。

事実かどうかも定かならぬロムルスとレムスの双子の兄弟の神話から(ロムルスが「二人で決めたルールを破った」というしごくもつともな理由で、弟レムスを殺すのが紀元前753年4月21日)、西ローマ帝国最後の皇帝ロムルス・アウグストゥスが“蛮族”オドアケルに廃位される紀元476年まで、ローマという舞台に次々と千両役者たちが登場し、消えていきます。例えば、先王を殺し、権力の座につきながら外征をやり過ぎて失脚するタルクィニウス驕慢王、ポエニ戦争でローマをあと一歩まで追い詰めながら、最後の詰めに誤る戦術の天才ハンニバル(そのため、部下に「あなたは勝利をつかむことはできる人だが、勝利を利用するすべを知らない」とののしられます)、墮落したローマ市民では戦にならないと判断し、「無産の民に目をつけ、高い給料、略奪の許可、土地の配分を餌に釣り寄せる」ことで傭兵体制をつくりあげる“決断と実行の人”マリウス、そのマリウス派を一掃して反動政治を断行する“幸運児”スラ、そして、事実上の帝政を打ち立てるユリウス・カエサル、こうした英雄たちが劇を盛り上げていきます(彼らは、尾藤先生ご推薦の『プルターク英雄伝』の主要登場人物でもあります)。

そうかと思えば、皮肉屋のローマ皇帝ティベリウスは、元老院が(カエサルやアウグストスのように)「その名を一年のどれかの月の名称としたい」とおべっかを使うと、「そんなことをして、13代目の皇帝が即位するときにはどうするおつもりか?」とからかいます。しかし、いつのまにかキリスト教が浸透し、皇帝の権威もやがて地に落ちて、中世がそこまでやってきている。ヨーロッパの政治と権力の源泉を知りたい方はぜひ、この本をお読みください。あわせて同じ著者のモンタネッリらの『ルネサンスの歴史』(中公文庫)もお奨めです。そこでは、村上先生ご推薦の『君主論』の著者、N・マキャヴェリも登場します。

「元来、私の教育主義は自然の原則に重きをおいて、数と理とこの二つのも
のを本（もと）にして、人間万事有形の経営はすべてソレカラ割り出してい
きたい。また一方の道德論においては、人生を万物中の至尊至靈のものなり
と認め、自尊自重いやしくも卑劣なことは出来ない、不品行なことは出来な
い、不仁不義不忠不孝、ソナ浅ましいことは、誰に頼まれても、何事に切
迫しても出来ない、一身を高尙至極にし、いわゆる独立の点に安心するよ
うにしたい者だと、まず土台を定めて、一心不乱にただこの主義にのみ心を
用いた」

（福沢諭吉『福翁自伝』より）

「お前のところに、子供はあるかエ。そして、学校にやるだろう。その子供
がどうだエ、文明の学問だと言って、本ばかり読んで、高尚の事を聞きかじ
って、口ばかしは上手だらう。そして、お前の言ふことを聞くかエ。エ、ソ
レご覧な。少しも聞きはすまい。そして、おやぢは頑固で困る等と言ってい
るよ。その子が、ソウ文明だ文明だと言うてしゃべって居るうちに、倉には
蜘蛛の巣がいっぱいになって、遠からず家を倒してしまふよ」

（勝海舟『海舟語録』より）

梅棹忠夫『文明の生態史観』（客野先生）

洋の東西、東洋と西洋。これは私たちが当然の
ことと考えている世界の区分の一つであり、世界
の見方である。しかし、これだけが区分の方法で
なく、実は中心と周縁という考えに基づいた新し
い見方を提案することが可能とする論文がおさめ
られている。物事をみるときは、自分の中で当
たり前と思っている既存の知識や常識を疑ってみ
ると、もしかすると今まで誰も気づかなかった新
しい視点がみつかるかもしれない。そんなことを
教えてくれる一冊である。

上山春平『照葉樹林文化—日本文化の深層』（客野先生）

佐々木高明『照葉樹林文化とは何か—東アジアの森が生み出した文明』（客野先生）

日本人が慣れ親しんでいる食文化、居住文化な
どの根源を、日本や東アジア諸国の典型的な森林
タイプのひとつである照葉樹林に求める論考であ
る。長い歴史の中で我々は森林の資源に依存しな
がら生きてきた。また、里山という形で、積極的
に森林と関わりながら、その恵みを享受して生活
してきた。その生活の蓄積の上に成立した文化が
森林のタイプの影響を受けていると考えることは

当然の帰結かもしれない。環境にやさしい暮らし、
環境共生型のライフスタイルを探るにあたり、日
本人の生活の根底にある文化のルーツを探ってみ
ることは意義深いことであろう。

梅原猛『日本文化論』（亀田先生）

1976年発行の古い本である。話の中には「ソ連」
「西ドイツ」といった言葉すら出てくる。「なんで
こんな古い本を推薦するんだ」と思う人もいるか
もしれない。

勿論、推薦するには訳がある。本書は西洋文化
が精神的な規範を失っていること、その輸入によ
って日本古来の精神文化＝仏教思想がこの国から
喪失されてきていることを指摘する。また、現代
において—ここでの「現代」とは1976年のこと
なのだが—敵という概念を持たない仏教の教え
を、より積極的に世界に発信するべきだと説く。
お気づきのように、すべて現代（2009年）でも通
じる。

本書は著者の富山県教育委員会での講演を書き
起こしたものであり、文章はとても平易である。
読書への入門としてもお勧めしたい。

福沢諭吉『福翁自伝』（古川先生）

本書は、近代日本の確立に大きな影響を及ぼし

た福沢諭吉本人による自伝です。特に、幕府による政治の行き詰まりを感じ開国の必要性を実感し、そのために大阪で厳しく学んだくだりや、咸臨丸に乗船してアメリカに行き、そこで何を見聞いたのかのくだりを読めば、福沢諭吉の偉大さを再確認できるでしょう。

福沢諭吉『学問のすゝめ』（鈴木(實)先生)

日本の明治期以来の経済発展をもたらした大きな要因の1つが、明治期の教育にあると言われていいる。本書は明治期に大きな社会的影響力をもち、啓蒙的な役割を果たした。諭吉の言う『学問』とはどのような内容なのかを、諭吉との対話を通して考えていただきたい。

夏目漱石『吾輩は猫である』（高畑先生）～近代化における苦悩を笑い紛らわす～

20世紀が始まって間もない1904年、原稿用紙の冒頭に「吾輩は猫である」と書き始めた瞬間、東京帝国大学講師・英文学研究者の夏目金之助の心中に、歓喜とも何ともつかぬ感情がほとばしったことでしょう。日露戦争さなかの日本で、猫が一人称で語るこの奇矯な物語が誕生すると同時に、欧米と日本の現実の間で心ひき裂かれていた孤独な英文学者は、小説家夏目漱石に変身します。猫＝他者からの登場人物達への暖かくも、遠慮のない批判的視線、そして登場人物たちがしばしば口にする日本の近代化への不安が交錯するこの小説は、20世紀の初頭を飾るにふさわしい傑作になりました。

ところで、この小説は、漱石がなれ親しんだイギリス文学にしばしば見られるように、筋らしい筋はありません。そこで描かれている「高等遊民の遊び」のような世界は、実のところ、漱石の頭脳に積み上げられた近代的知識と、それを消化しきれない当時の（今も？）日本を対比させます。例えば、（漱石の一分身である）主人公の珍野苦沙弥先生は、奥さんに書物の大事さを説教すべく、『ローマの歴史』にも登場するタルクィニウス驕慢王を例にだしますが、奥さんの方は漱石のもう一人の分身、美学者迷亭先生を相手に“タルクィニウス”を“樽金”と呼び、あまつさえ「私は唐人の名はむずかしく、覚えられませんわ」とうそぶきます。これらのやりとりは、知識人（苦沙弥

先生）のある種の傲慢さ（苦悩の裏返しでもありますが）と、庶民（奥さん）のたくましさの対照の妙とも言えましょう。逆に言えば、漱石は自らの滑稽さを冷静に眺めることのできた希有な文化人なのです。

一方、苦沙弥夫人に「どんなのが“月並”なんですか？」と問い詰められた迷亭先生は、「中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な“月並”が出来上がります」といなします。そんな席に、時折ふらふら現れる苦沙弥先生の教え子、東京帝国大学理学士の水島寒月先生（モデルは科学者寺田寅彦＝松村先生ご推薦の『雪は天からの手紙—中谷宇吉郎エッセイ集』の著者中谷宇吉郎の先生です）は、「首くくりの力学」を論じながら、「蛙の眼球の電動作用に対する紫外光線の影響」の研究のため、真球を得るべく日々、ガラス玉を磨っています。この nonsense にして strange taste な小説は、実は和洋の教養の宝庫であり、苦沙弥・迷亭の両先生の珍妙なやりとりに、やけに冷静な猫の感想を交えながら、明治という時代に、否応もなく近代化に直面させられた日本人の惑いの日々、皆さんをしばしの間誘ってくれます。同じ夏目漱石の学習院での講演記録『私の個人主義』（講談社学術文庫）もまた皆さんにお薦めです。

ちなみに、漱石よりも33年早く生を受け、とことん楽天的に日本の近代化をプロモートしたのが、古川先生ご推薦の『福翁自伝』および鈴木實先生ご推薦の『学問のすゝめ』の福沢諭吉でしょう。一方、日本の近代化を支えた思想的ベースを世界に説明しようとしたのが、亀田先生のご推薦である新渡戸稲造著『武士道』でしょう。

新渡戸稲造『武士道』（亀田先生)

「宗教無し！どうして道德教育を授けるのですか」

当時（明治後期）においても、日本にはいわゆる宗教教育は存在しなかった。そのような社会においてどうやって質の高い道德教育がなされてきたのか、外国人から尋ねられた新渡戸は答えに窮する。開国前もその後においても、日本人の道德心の高さは欧米列強からの賞賛の対象だった。しかし当時この問いに答えられる日本人は誰としていなかった。その道德の高さはあまりに自然なこ

とだったのである。

新渡戸はその起源を義・勇・仁・礼・誠といった日本古来の武士道に求める。日本人なら一度は読んでおきたい名著である。

星新一『人民は弱し 官吏は強し』（村上先生）

本書は、日本におけるショートショート（俳句や和歌に匹敵？）の開拓者である星新一の例外的な長編小説。というよりもノンフィクションであり、星の祖父が大正期に創立した星製菓が、今の厚労省に当たる行政官僚制によっていかに意図的に廃業に追い込まれたかを描いたもの。行政行動を見る上で、政治学・行政学のサブ・テキストとしても最適。繰り返される冤罪事件や国策捜査は、官僚制（とくにストリートレベルの官僚制）の病理現象ではなく、意外とく日常活動＜が＞内包している生理現象の一つかもしれない。

司馬遼太郎『峠』（鈴木（英）先生）

「政策」と言うものは“やりたい事”と“実際に起きている事”とのあいだにある“現実”。そのギャップの問題を解決するために新たな策を講じることです。総合政策学部の学生にぜひ読んでもらいたいのは、『峠』の主人公である長岡藩士の河井継之助の話です。幕末に北越戦争がありました。彼は越後長岡七万四千石という小藩の家老として官軍にも幕府にも属さず独立の国として長岡藩を存続させようとしていました。

北越戦争はそのときに進行中の大きな戊辰戦争の一端として起こりました。長岡藩は中立を守り東側にも西側にも組せずと言う立場を官軍に理解されず長岡藩の防衛のため官軍と戦うと言う選択肢を河合継之助は取って行くのです。

「政策」は一言で云えば「選択」です。この『峠』を読みながら河合継之助がどのような思考を経て『選択』をして来たか、また何を求め、如何にその目的を達成しようとしたのか、考えさせられることは多々あります。

継之助の「行動を伴わない知識は必要がない」という言葉を私は大事にしています。状況を的確に捉え、迷わず判断すると言う事は非常に重要な行動原理です。ぜひ読んでください。

北康利『白洲次郎 占領を背負った男』（鈴木（實）先生）

白洲次郎はカッコ良い人です。プリンシプルを重視した日本人です。氏の夫人は白洲正子です。どのように氏は戦後を生きたのか、ぜひ本書をひもといてください。なお白洲夫妻のお墓は三田にあります。

城山三郎『落日燃ゆ』（亀田先生）

広田弘毅という人をご存知だろうか。内閣総理大臣を一度、外務大臣を三度務め、日本を太平洋戦争へ導いた罪でA級戦犯として処刑され、靖国神社に祀られている人物である。

しかし彼は一貫して戦争に反対した人物でもある。その結果、時には不遇の時代を過ごした。「風車。風が吹くまで昼寝かな。」時代が望まぬ方向へと流れていく姿を眺めながら詠んだ句である。

動乱の時代の中で時代は再び彼を要し、彼は総理として戦争回避の先頭に立つ。しかし軍部に抗しきれず下野。そして終戦後、戦犯として東京裁判に臨む。

「文民の誰かが殺されねばならぬとしたら、ぼくがその役をになわねばなるまいね。」法廷では一言の言い訳もせず、軍部に抗しきれなかった自分の責を全うすべく、文民としてただ一人絞首台に上る。

日本がなぜ戦争に向かったのか、なぜ止めることができなかったのか。靖国問題、外交政策にも多くの示唆を与える一冊である。

藤原正彦『国家の品格』（鈴木（實）先生）

日本では第二次大戦後、無国籍的な議論が、先進的あるいは進歩的として、もてはやされる傾向もあった。著者は英米に滞在し、異文化というもの肌で感じた数学者である。本書を読んで、海外を歩いていただきたい。

* * * * *

M・マクルーハン『マクルーハン理論—電子メディアの可能性』(伊佐田先生)

著者のマクルーハンは、メディア研究の草分け的な存在であり、現在でも重要な研究者として位置づけられています。この本は1960年に編集されたものですが、メディアに対する考察は現代においても精彩を放っています。メディアを学ぼうと考えている学生諸君には、一度は手にして欲しい本です。あなたも電子メディアによるコミュニケーションの可能性について考えてみませんか。

情報教育学研究会(IEG)・情報倫理教育研究グループ編『インターネットの光と影』(中條先生)

加害者・被害者にならないための情報倫理入門
インターネットの発達・普及によってわれわれの生活はとても便利で豊かになりました。電子メールは皆さんの学生生活においても必須のツールとなっていますし、勉強や趣味の世界でもネットから多くの情報を手軽に入手することができます。その半面でネットを悪用した犯罪、誹謗中傷、プライバシーや著作権の侵害など多くの問題も発生しています。この本はインターネットの利便性(光の面)と危険性(影の面)の両面について具体的に分かりやすく解説しています。図表やイラストを多用しているので読みやすく楽しく学ぶことができます。インターネット社会を安全・快適に生きるためのガイドブックになるでしょう。

岡部一明『インターネット市民革命—情報化社会・アメリカ編』(吉野先生)

現役学生にとってみれば、「インターネット」はすでに与えられている便利なツールと考えるのが自然なことであろう。1996年に書かれた本書では、インターネットをはじめとする通信インフラのアメリカにおける普及活動が、1. 市民同士が安価にコミュニケーションをとることができるための運動、2. それまで市民の情報の拠点であった図書館を解放する運動、3. 新しいネットを活用した「情報化時代の市民活動」のインキュベート、4. 市民参加で作られたメディアを提供する公共(パブリック)アクセス・チャンネルの推進、などさまざまな領域に広がっていたことを、アメリカの市民活動の先進地域、サンフランシスコの諸活動の実例とともに紹介している。これは貴重な歴史

のスナップショットである。いま本書を読み直し、改めてインターネットの可能性を考えたり、現在のパブリックアクセスを調べるのもよいし、本文中の諸活動の十数年後の変遷を追うのも面白いだろう。

フランク ウェブスター『「情報社会」を読む』(吉野先生)

この本は、情報社会論を自分の専門性の一部にしたいと考えているすべての人にとっての必読書と言い切ってよい本の一つである。ただし、その内容については、平易であると言い切ることはできない。インターネット社会を論ずる上で不可欠な、ハーバーマースによる公共圏の議論をはじめに、情報社会を論ずる主要論者のエッセンスを概観し、まとめきったのはフランク・ウェブスターの力量によるものであろう。本書を、毎日少しずつ、文中に取り上げられているさまざまな参考文献に触発されたながら、読み進めていくのは悪くないのではないだろうか。意欲と語学力のある向きには、第二版が出版されている原著を読むのもよいだろう。

スティーブン・ストロガッツ『SYNC』(山田先生)

「わかることって楽しい！」っていう気分を教えてください。魚の群れが優雅なくねり運動を見せたり、鳥たちが群れをなして飛んでいく、集団としては意識をもたないはずなのに、なぜか「同期」し、美しい模様を織りなしていく。それが本書の対象とする「Sync」です。アインシュタインやブライアン・ジョゼフソンから社会心理学者のスタンリー・ミルグラムなど、さまざまな分野の科学者たちがこの「同期」という現象に取り組みました。「同期」という現象に魅せられた20世紀を代表する科学者たちの姿が、たっぷりに描かれているのも、本書の魅力となっています。

高橋幸雄・森村英典『混雑と待ち』(山田先生)

難しいことを、複雑に、難しく説明する学者は世の中に大勢います。でも、本質を“ずばり”と切りだして、やさしく説明できる優秀な学者は少ししかいません。「混雑と待ち」はそういうすぐれた研究者二人が書いた本です。読めば、目からウロコ、世の中の見方が変わることを、請け合いです。

ラッシュアワーや切符売り場の行列から、人事の停滞、環境問題まで、さまざまな混雑現象を取り上げて、「なぜ混雑するのか」、「待たせない方法はないのか」あるいは「うまい待たせ方とは？」と

いった観点から、混雑現象を解き明かします。「待つ」のも「待たされる」のも嫌い、そんなあなたにお勧めの一冊です。

* * * * *

「昔のことは考えない。大切なのは永遠なる現在だ」

(サマセット・モーム『月と六ペンス』)

「人間はすべて死ぬ。だから人間は幸せでない」

(アルベール・カミュ『カリギュラ』より)

T・バトラー＝ボードン『世界の心理学50の名著 エッセンスを学ぶ』(渡部先生)

心理学に興味がありますか？ と尋ねると、かなり多くの方が、「興味があります」と答えるでしょう。しかし実際に、その人たちが、どんな内容のことを「心理学」で知ることができるかを尋ねてみると、かなりの広がりがあります。それは、心理学と呼ばれる学問領域が、人の性格、対人魅力、リーダーシップ、組織、知能、学習、生きがい、恋愛、などといった非常に広範な内容を含んでいるからです。そのため、心理学を勉強したいと思っても、どこから手をつければよいのか、迷う人も少なくないでしょう。この本は、広範な心理学の領域に精通した著者が、心理学の中でも、「これは理解しておいてほしい」と考えて選び出した50の名著をダイジェストしてくれた本です。目次を見て、「これが面白そうだ。ここから読んでみたい」と、自分の興味を深めることもできるし、「こんな内容も、心理学でカバーされていたのだ。」という新たに発見もできると考えます。パラ

パラとめくるだけでもいいので、ぜひ一度手に取っていただきたい本です。

デビッド・D・バーズ『いやな気分よ、さようなら - 自分で学ぶ「抑うつ」克服法』(渡部先生)

みなさんは、憂鬱な気分を経験したことはありますか。例えば、いつも楽しんでやっていたことなのに、それをおもしろいと思えなくなったり、自分のすべてを否定したくなったことはありませんか。このような経験を大抵の人はしているはずです。「いやな気分よ、さようなら」は、「抑うつ」といわれる前述したような気分をどうやって克服できるかをわかりやすく教えてくれる本です。その元になっている認知行動心理学は、私たちが憂鬱になる原因を、物事の捉え方、考え方における偏りと捉え、その考え方の修正法をひとりひとりが学習できると考えています。アメリカで発売された当時、爆発的に売れた本で、しっかりとした心理学の考え方を元にした「セルフ・ヘルプ」の本です。

* * * * *

「論理家は、大西洋やナイアガラについて見たり、聞いたりしなくても、一滴の水をみることによって、その存在の可能性を推定するであろう」

(シャーロック・ホームズ、コナン・ドイル『緋色の研究』)

ジャレド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄—1万3000年にわたる人類史の謎(上・下巻)』(久野先生・安高先生)

「H教授—「銃・病原菌・鉄」。いやあ、これは名

著だよ。

現代社会はアングロサクソン、つまり白人が世界を制しているけど、それは決して人種として彼らが優秀だったからでなく、いくつかの環境条件

の違いがそうさせたにすぎないと論じたものだ。

著者は、もともとはニューギニアでフィールドワークしていて現地の人の頭のよさに感心したそうなんだ。その現地の人から、「いろんな資源を活用してさまざまな現代的な製品を作り、世界を制したのは白人で、われわれではなかったのはどうしてか」と聞かれたそうだ。

それを何十年か考え続けてその答えとして書いたそうだ。

Aさん—環境条件の差って？

H教授—例えば、栽培に適した植物があったか、家畜化する動物がいたかどうかだ。馬は家畜に適しているが、シマウマはどうやら無理なようだ。Aさん—それだけ？ 随分大胆な推理ですね。

H教授—もちろんそれだけじゃないけど、そうしたちょっとした条件の違いが、加速度的に差を広げていったと論じている。ボクはすごい推論だと思いきり感服したけど、同僚のT先生は、ハタタリが過ぎると否定的だった。そこがアカデミシャンとボクの差かな。」

チャールズ・ダーウィン『種の起源(上下)』(高畑先生)～進化論、現実と理論のすりあわせ～

ものごとには“現実(あるいは経験)”と“理論”があります。この二つを上手くすりあわせることができれば、申し分ありません。しかし、そんなことが果たしてできるのか？ 世の中の経済の浮き沈み一つをとってみても、理論と現実の関係が容易ならざることであるのは、皆さんもご存じでしょう。

古くは、ルネサンスの大芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチが、海から遠く隔たった山中の貝の化石(=現実)を見て、考えます。「貝類はその泥の下に埋まって死んでいると、泥は高くなってついに海底が空中に露出するに至った。今やこういう海底は丘陵や高山となったほど高いところにあるが、その山腹の浸食者たる河川がその貝殻層を暴き出す(『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』岩波文庫)。つまり、化石は過去の生物であり、その化石を並べていくと、生物はどうやら時の流れと共に変わっているようだ。それを煎じ詰めれば、生命は単一起源であり、そこから次々に枝分かれしていくもの=系統樹が描けてしまう。

それでは、なぜ、生物は進化していくのか？ 今日が平穏無事ならば、明日のさらなる幸福を求めて、形や人生を変える必要がどこにあるのか？ 19世紀の半ば、C・ダーウィンは、それは“自然選択(あるいは自然淘汰)”が働くためだと指摘します。それも次世代に残せる子供(今日では、遺伝子とも)の数をめぐって、まったく無意識のうちに展開する競争の結果ということになります。この自然選択説こそ、その後様々な議論を経たうえで、進化についての“理論”=進化論の基本となる学説になりました。

1859年の出版時、「ヒトの先祖はサルだ」という(今振り返ると、必ずしも正確とは言えない)興味で注目を集めたこの本は、実は、生物と生命をめぐる多くの謎と、それを解くヒントに満ちた自然科学史上の傑作であり、今日もまだ、多くの人々を引きつける魅力に満ちています。

マット・リドレー『やわらかな遺伝子』(山田先生)

政策と遺伝、一見、無関係に思う人もいるでしょうが、人の本性に関する知見を社会政策に反映したいなら、本書は必読です。ヒトゲノムの解読から、人間は3万個の遺伝子からできていることがわかりました。でも、これでどうしてヒトが「設計」できるのでしょうか？ 遺伝子と環境(生まれと育ち)、いったいどちらがヒトの本性を支配しているのでしょうか？ この本は、遺伝子と環境の見事な相互関係を解き明かします。著者のマット・リドレーはオックスフォード大学で動物学を学び博士号をもつサイエンスライターですが、彼の書く文章はいつも知的でバランスがとれ、しかも面白い！こんな三拍子のそろった書き手はなかなかいません。

中谷 宇吉郎(池内了編)『雪は天からの手紙—中谷宇吉郎エッセイ集』(松村先生)

冬になると空から降ってくる雪を手袋で受け止めたことのある方は多いと思う。手袋についたかと思うとはかなく消えてしまう。その雪の形は二度と同じ形ではない。中谷宇吉郎は、その雪の結晶ができる過程に着目した。日々の暮らしの中で、疑問に思ったことに取り組み姿勢に深い感動と感

銘を受けた。高校生の時に南極物語に感動をして、未知の世界にあこがれをもったことを、今更なが

ら思い出す。わからないことに、取り組む姿勢を大切にしてほしい。

* * * * *

「水におちたらうまく泳ごうと下手に泳ごうと、泳ぎ方なんか問題じゃない。とにかく水から出なくちゃならないんだ。さもなけりゃ、溺れてしまうだけだ」

(サマセット・モーム『月と六ペンス』)

「あなた方はみな失われた世代(ジェネレーション・ペルデュ)の人たちです」
(G・スタイン、ヘミングウェイ『日はまた昇る』エピグラフ)

神戸女学院大学文学部総合文化学科編『教養教育は進化する』(中條先生)

「教養教育」という言葉は皆さんにとってはなじみのないものかも知れませんが、従来の日本の大学では長年にわたって1、2年次で主として「一般教養」科目を履修し、3年次以降に「専門教育」科目を履修するようになっていました。最近ではこのような明確な「教養課程」「専門課程」の区分けはされていませんが、大学の学部での学びがとかく「専門的」な知識を習得することに重点が置かれる中で、新しい「教養教育」のありかたが模索されています。この本は神戸女学院大学文学部総合文化学科(「総合」を含む学科名ですね!)の先生方の論考と東京大学の佐藤学教授による「市民的教養の形成へ」と題する講演会の講演録を含めています。「知識基盤社会」において大学生は何を学ぶべきかについて考える良い機会を与えてくれるでしょう。

DC・ゴース、GM・ワインバーグ『ライト、ついていますか—問題発見の人間学』(伊佐田先生)

問題にぶち当たっては有効な解決策が得られずに右往左往していませんか? そんな時は、問題の本質は何なのか、今一度、冷静に考えてみましょう。問題だと思ったことが実は問題ではなく、本質は別のところにあるかもしれません。

この本を読めば、問題の本質にたどりつき、ライトがついた状態にいるためのヒントが得られるでしょう。総合政策学部の学生諸君には、必ず読んで欲しい本の一つです。

本多勝一『中学生からの作文技術』(亀田先生)

(例1) 私は小林が中村が鈴木が死んだ現場にいたと証言したのかと思った。

(例2) 鈴木が死んだ現場に中村がいたと小林が証言したのかと私は思った。

同じことを言っている、例1は読みにくく例2は読みやすい。なぜか? 理由を知りたい方はご一読を。

櫻田大造『「優」をあげたくなる答案・レポートの作成術』(柴山先生)

レポート・論文の書き方については、いろいろな研究者が学生向きに書いている。やさしいものから高度なものまでであるが、この本を薦める理由はずばりこれである。櫻田先生は、カナダ外交の大著もある有名な研究者であるが、本学の教員として関学生が何に困っているかを知り、どう解決すべきかについても精通しているからである。正直、この本は、学部生のみならず大学院生も参照すべきほどの高度な内容である。1冊あるとなにかと便利であり、卒業後も使える。

林望『文章の品格』(園田先生)

まず何より、とても読みやすい本ですので、「読書はちょっと…」苦手な学生さんにお薦めの一冊です。書き言葉と「日ごろの話し言葉」との繋がりが具体的に説明されていて、皆さんが社会人として身につけるべき日本語をあらためて見直すきっかけになるかもしれません。また、国語の教科書を離れて久しぶりに(または初めて)、日本の古

典の数々に目を通したくなるかもしれません。今後さらに外国語の上達を目指すためにも、母語の基礎的な能力を磨くことが大切である、と実感できることでしょう。

武田文・亀井伸孝(編)『アクション別フィールドワーク入門』(吉野先生)

社会の現場を学生・研究者の立場から調べるのならば、「フィールドワーク」という手法について指導を受ける機会がきっとあることだろう。“よそ者”である調査者が他者の生活・活動の営みの現場に入っていくことについて、慎重になりすぎるといえることはないし、その基礎をおろそかにし

てもならない。そんなことを考えていると、新しいことを知る楽しい研究手法のはずではなかったのか？ と、なんだか窮屈に感じる人もいるかもしれない。

そういうときにお勧めしたい入門書が本書である。新進気鋭の若手研究者たちが、国内外を問わないさまざまなフィールドワーク調査の現場で、調査者の枠を超えて現地で行ってしまった活動＝アクションに焦点を当てた実践記である。一つ一つの実践がコンパクトにまとまっており、研究者でない人にも読みやすい文体で書かれている。アクション別索引というものも付いているので、それを引きながら楽しむのもよいだろう。

* * * * *

なにせうぞ くすんで
一期は夢よ ただ狂え
(閑吟集)

青春はうるわし されど逃れゆく
楽しみてあれ 明日は定めなきゆえ
(ロレンツォ・デ・メディチ、「バッカスの歌」)

馬上少年過 (馬上少年過ぐ)
世平白髪多 (世平らかにして白髪多し)
残軀天所許 (残軀天の許すところ)
不樂復如何 (楽しまずして如何せん／楽しまざるは如何せん)
(貞山 伊達政宗)

白川静『漢字 生き立ちとその背景』(鈴木(實)先生)

日常、御世話になっている漢字はどのようにして生まれたのだろうか。この本は深い学識とともに、大胆な切り口でこの謎に迫っている。ぞっとする本である。皆さんもきっと白川氏が地球レベルを超えた知的な巨人であるのを誇りに思うだろう。

関谷一彦、山上浩嗣、細見和志(編著)『はじめて学ぶフランス—関西学院大学講義—』(中野先生)

フランスは合理的思考を大切にす国です。デカルトの哲学、法制度、行政(外交)などのフラ

ンス語を使用する分野においても『明晰ならざるものは仏語にあらず』というほどです。この国の文化、特に芸術、グルメ、観光などについては多くの日本人が関心を抱いてくれます。しかし、合理性に倦み疲れたフランス市民は日本のあいまいな美学にあこがれます。来日するフランス人観光客は昨年のリーマンショックによってもほとんど減少しませんでした。フランス人にあこがれられる日本文化をよりよく理解するためにも『はじめて学ぶフランス—関西学院大学講義「総合コース・フランス研究」より—』をお読みください。究極の合理性、すなわちフランス数学、科学技術などの美学についてもほんの少しですが私が紹介しています。

**加藤 恭子『星の王子さまをフランス語で読む』
(中野先生)**

“Le Petit Prince”、これをみなさんはどのように読みますか？ レ・ペチット・プリンスでしょうか？ いえ、これはフランス語ではル・プチ・フランスと読みます。日本語では星の王子様と訳されています。フランス語の語感だと「(僕の)かわいい(いとしい)子」というくらいの意味です。みなさんは中学校から英語を外国語として勉強してきました。実は外国語の勉強は異文化理解でもあるのです。英語は英語が使う生活空間を共有している人たちが使っている言語です。フランス語にはフランス語の生活空間があります。本の中にきつねさんの話が出てきます。きつねさんは星の王子様に「『apprivoiser』されてないから友達になれないよ。」と言います。この単語は英語ではtameと訳せますが、日本語に訳すことは非常に難しい単語なのです。なぜなら、普通の日本人は家畜と一緒に生活していないからです。このことが何を意味しているのか。興味をもってくださったあなた、さっそくこの本を手にとり読み始めましょう。著者の加藤恭子さんの文章はとってもよみやすい文体です。

ミヒヤエル・エンデ『モモ』(鎌田先生)

人間は、時間を生きる存在である。過去を想い出し、未来を予想することで、目先の欲望の殻から抜けだし、人と人、人と自然の共生を通して「人間らしさ」を育んできた。しかし現代人は、灰色の時間泥棒たちの甘言に乗って時間を忘れ、後先を考えずに金儲けに熱中するようになった。灰色の男たちの企みは、そのように換金された時間の一部を人々からかすめ取ることである。モモは、灰色の男たちに挑戦し、盗まれた時間を取り返す。しかしこのストーリーは骨格に過ぎない。文学作品としてのモモの魅力は、そのストーリーに沿って展開されるエンデの感性と人間らしさに触れることである。モモの特技は人の話に耳を傾けることであった — 自己主張と自己顕示の悪霊に満たされたわたしたち現代人には何と耳の痛いことであろう。時間の番人マイスター・ホーラに導かれてモモは、そして読者は「人間らしさ」のみならず「時間」が生成する場面に立ち会う。この美しく神秘的な経験を、人は一生忘れないだろ

う。

アンドレ・ジッド『狭き門』(鎌田先生)

本当の愛とは、自己の欲望に駆動された自分本位の愛ではなく、愛する人(々)の立場を考えた自己犠牲的な愛である。しかし、自己犠牲的な美しい愛は、純化されるとともに愛そのものを犠牲にしてしまう — そのようなせつなくもどかしい悲恋の物語をとおして、ジッドはジェロームとアリサの心の微妙な揺らぎを描きだす。私たち現代人は映像作品によって行動の連鎖をリアルに見ることができるようになった半面、背後でそれらの行動を導く心の細やかな流れを感受・共感する機会が少なくなってきた。内的経験の豊かさを再発見するために本書を推薦します。

大江健三郎『新しい人よ、眼ざめよ』(井垣先生)

日本が誇るノーベル賞作家大江健三郎の本を読んでみませんか？

若い頃に書かれた大江作品は、難解なものが多いのですが、この本はとても読みやすいので、大江作品を読んだことがない人にはお勧めの一冊です。大江氏の、障がいをもった息子をモデルとして書かれたものです。弱者の視点を大切にする本学部の学生には、是非読んでもらいたい一冊です。

三島由紀夫『春の雪—豊饒の海・第一巻—』(鎌田先生)

人間として生きるとはどういうことだろうか。 — 私たちは生を、生物学的生命として説明することに慣れていて、しかし、人間の生の特徴は、自らがその生について考え語る(自己言及)という円環的性格にある。それを東洋の伝統思想は輪廻転生と表現した。『春の雪』は松枝清顕と綾倉聡子という華族の家柄のふたりの禁断の恋の物語の体裁をとり、壮大な人間観・自然観に基づいた三島由紀夫の(一見)輪廻転生四部作『豊饒の海』の冒頭を飾る。しかし『春の海』は、恋愛という個人的なできごとが、それをとり囲む社会や歴史にしっかりと埋め込まれ、ときに翻弄されていくものでもあることをも考えさせてくれる恋愛文学の最高峰として、それだけでも十分読み応えがある。

サマセット・モーム『月と六ペンス』（高畑先生） ～美と現実の相克とは？～

1903年5月8日、後期印象派の画家ポール・ゴーギャンは南太平洋のマルキーズ諸島で、その傲岸不遜で奔放な生涯を閉じます。享年54歳、35歳で株式仲買人の職を捨て、画家を志した結果、心ならずも妻子からも見捨てられる。樂園を求めて渡った島々でも、自らの夢に裏切られた果ての終末でした。大作「われわれはどこから来たのか われわれは何者か われわれはどこへ行くのか」があとに残されます。

彼の生涯をベースに、イギリスの作家サマセット・モームが1919年に出版した小説がこの『月と六ペンス』です。夜空に白く輝く“月”は、ゴーギャンが死を賭けてまで追い求めた“美”を、そして財布の中でぼんやり光る“六ペンス”硬貨は“現実”を象徴していると言われていますが、日本語では「月とすっぽん」がぴったりです。

物語は、主人公ストリックランド（ゴーギャン）がある日、“美”にめざめ、画家になるべく、目標

にむかって突っ走る様と、その彼にふりまわされる周囲の人々を描いていきます。ヨーロッパには彼を受け入れる余裕などなく、ストリックランドは何時しか、南太平洋に流れていきます。モデルのゴーギャンも実際、フランスにいる友人から「君は（ヨーロッパに）還って来てはいけない」、すでに芸術史での伝説の人になってしまったのだから、と宣告されてしまいます（小林秀雄『近代絵画』岩波文庫）。

その一方で、ゴーギャンと異なり、小説『月と六ペンス』の結末にはある種の救いがもたらされます。ストリックランドはついに自分の居場所を見つけ、他者の愛に気付きます。ハンセン氏病に感染して死に至るとはいえ、島の女性の伴侶の助けで、視力を失うまで描き続けます。現実にはありえないヨーロッパ人の夢が、しばし、最後に実現する。美のみを追い求める人生が、そこで終の棲家を見つけ、裏切りの苦みを感じることなく、ついに完結する。皆さんも是非、美と現実が入り交じるこの世界に親しんで下さい。

世の中はとても臆病な猫だから

他愛のない嘘をいつもついている

包帯のような嘘を見破ることで

学者は世間を見たような気になる

（中島みゆき「世情」アルバム『愛していると云ってくれ』より）

愚者には愚に従って答えるな、

君も愚者にならないために。

愚者には愚に従って答えよ、

愚者が自分を智者と思わないために

（『箴言集』26:5-6、J・オウエル『カタロニア賛歌』エピグラフ）